

リサイクルトナーカートリッジ¹市場の動向

1. リサイクルトナーカートリッジ市場拡大の背景

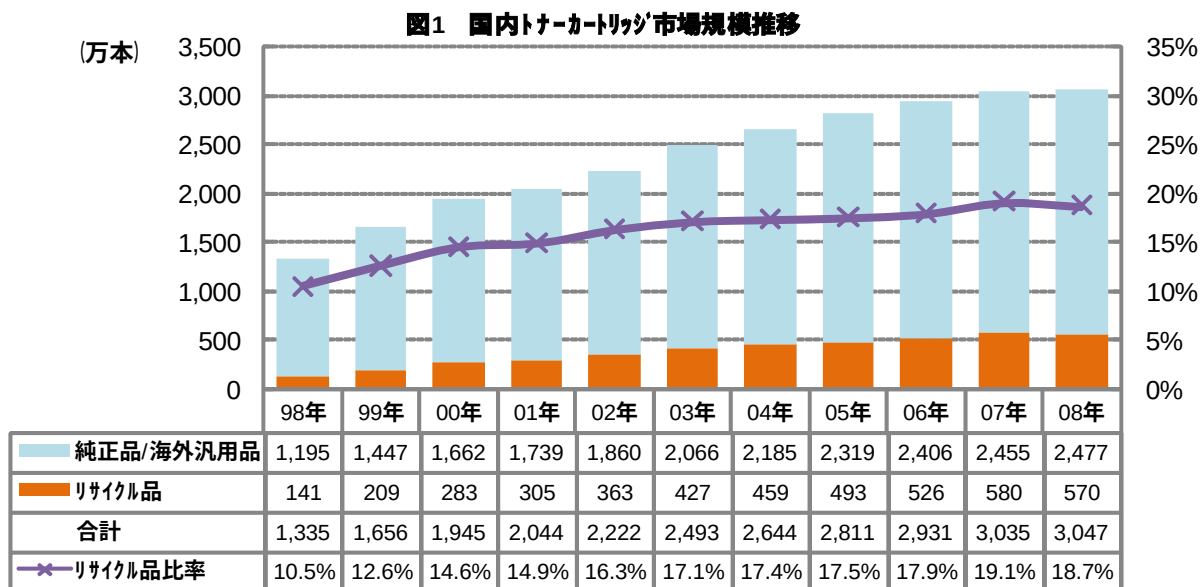
トナーカートリッジとは、モノクロ/カラープリンター、複合機、FAX等の事務機器の印字に用いられるトナーを詰めたカートリッジのことで、生産者、販売ルート別には、事務機器と同時に出荷される純正品、事務機器メーカーが製造した純正品、事務機器メーカーによるリサイクル品、リサイクル事業者によるリサイクル品、海外輸出品の再輸入品等に分けられる。

トナーカートリッジは、印刷機能の心臓部とも言える感光ドラムを含み、100点程度の部品からなる複雑な構造であるが、一般的に事務機器メーカー以外の事業者でも再利用が可能である。リサイクル事業者は回収したカートリッジの検査、分解・洗浄、消耗した部品の交換、トナーの充填、組立て、印字テスト等の工程を経てリサイクルを行っている¹。

資源の有効利用の観点から消耗品であるトナーカートリッジについても再利用が求められていること、リサイクル事業者の製品は純正品に比べて相当程度安価でユーザーにとってもメリットが大きいことから、近年リサイクルトナーカートリッジ市場が拡大している。

2. リサイクルトナーカートリッジ市場規模推移

08年の国内トナーカートリッジ市場²は前年比+0.3%の3,047万本となった。うちリサイ



(資料) 日本カートリッジリサイクル工業会資料より住友信託銀行調査部作成。

¹ トナーは極めて細かい粉塵であるため、人体への影響、爆発の可能性等の観点もあり、ユーザー自身が再生することは困難であり、専門の事業者が作業することが必要。

² リサイクル事業者による製品のみであり、事務機器メーカーによるリサイクル製品を含まない。

ル品は同▲1.8%の 570 万本と統計開始以来始めてマイナス成長となり、そのシェアは 18.7%となった（図 1）。

しかし、中長期的に見ると 98 年のリサイクル品は 141 万本でシェアは 10.5%であったことから、この 10 年間で市場規模は約 4 倍、シェアは 2 倍弱まで拡大している。

3. リサイクル事業の課題と展望

（1）競争激化と利益水準の低下

カートリッジのリサイクル事業は、人の手作業による工程が多く、カートリッジの回収、再生工場でのトナーの充填、納入といった比較的参入障壁の低いビジネスモデル³であり、国内外に事業者が増加してきた。顧客ルートを既に持っている事務機器販売事業者等の参入が多く、事業者によって不良品率の高低、技術力、トラブル時の対応等の違いはあるが、一定の水準を満たしていれば、ユーザーにとっては低価格が最大のメリットであることから⁴差別化が難しく、競争激化に伴う価格下落の継続と利益水準の低下が課題となっている。

（2）製品への信頼性

製造者以外によるリサイクルであるが故に製品のばらつきが起きる場合もあり、僅かながらも一定の不良品が混じることは避けられない上に、カラー化や新製品に対する対応が常に必要となる。そのため、日本カートリッジリサイクル工業会では、リサイクル品の品質向上に向け、試験方法の標準化等の取組みを行っている。

（3）まとめ

トナーカートリッジリサイクル事業には、競争激化に伴う価格下落の継続と利益水準の低下、品質向上への取組み等の課題がある。また、企業のコスト削減や環境意識の高まりによるプリントの枚数の減少や、中長期的には文書の電子化に伴う印刷需要の低下も想定される。しかし、資源の再利用の観点や、低価格のメリットが既に顧客に認知されていることから、リサイクル比率の向上によりトータルでは市場は堅調に推移するものと考えられる。

将来的にはリサイクル品比率は欧米並みの 30%程度まで上昇していく可能性もあるが、空のカートリッジの安定的な確保が課題となっていること、上位メーカーのシェアが高く相対的に規格統一が進んでいる海外と異なり多種多様なカートリッジへの対応が必要であること等から、25%程度まで拡大するとの見方もある。

（古瀬：furusey@sumitomotrust.co.jp）

※本資料は作成時点で入手可能なデータに基づき経済・金融情報を提供するものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。

³ 再生工程をアウトソースすることも可能。

⁴ 日本カートリッジリサイクル工業会アンケート（08/12 月）では、リサイクル品を使う理由として 91.0%のユーザーが「純正品に比べて価格が安いから」と回答している（複数回答あり）。なお、「環境にやさしいから」は 36.9%に留まっている。